



Title	地域リハビリテーションの充実に向けて：大阪市（浪速区）における取り組み
Author(s)	山本, 千春
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 53, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

機能訓練事業事例発表会

地域リハビリテーションの充実にむけて —大阪市（浪速区）における取り組み—

大阪市浪速保健所 山本千春

1. はじめに

浪速区は、人口49,072人で65歳以上の人口は5,943人で総人口の12.1%、うち22.1%(1,315人)は独居老人である(60年国勢調査)。在宅ねたきり者把握数は103人で、脳血管疾患が49.5%と約半数を占めている(62年7月現在)。

大阪市では機能回復訓練事業を4カ所で実施しており、浪速保健所では区老人福祉センターにおいて、61年1月より区医師会の協力を得て、身体機能、社会性の維持回復、精神的支援を目的として行っている。

2. 訓練の概要

対象は、40歳以上の脳血管疾患の後遺症をもつ者で、医療終了後も継続して訓練を行う必要があり、一人で、あるいは介護者が付き添って通所できて、3時間位は座位保持が可能な者としている。参加者の年齢は、以下の表の通りである。

表 参加者の年齢別うちわけ(人)

年齢	男	女	計
40代	1		1
50代	5		5
60代	1	1	2
70以上	7	5	12
計	14	6	20

訓練は週1回、6か月間とし、終了後も訓練が必要と認められる者は、訓練終了者として継続訓練を行っている。訓練内容は、理学療法士、保健婦、看護婦、作業療法士による集団及び個別指導で、各々の障害の程度にあわせて行っている。紙芝居の製作、彫刻、特

別行事として年賀状交換会、保育園児との交流会、その他健康教育、体操、歌唱、ゲームなど行っている。また、家庭での継続訓練と日常生活指導のため、参加者とスタッフが記入しあう「訓練票」を作成している。

訓練開始時、中間時、終了時の3か月ごとに、訓練の適否、訓練目標及び計画の立案と変更、訓練効果と継続訓練適否の判定などを合議する、「機能回復訓練運営研究会」をもうけている。構成メンバーは、保健所長、区医師会内科医・整形外科医、老人福祉センター館長、理学療法士、作業療法士、保健予防係長、保健指導係長、保健婦、看護婦である。

訓練を重ねていくうちに、61年11月より家族会「やわらぎ会」が発足した。家族間の交流、介護意欲の向上、介護者の健康管理、健康相談を主な目的として月1回、訓練時間中に行っている。



3. 考察

この事業に取り組んで2年足らずではあるが、四つ這いができるようになったり、指がスムーズに組めるなど、運動機能に少しずつ変化があらわれている。また訓練開始前は外出や他人との接触がなく、表情も暗く消極的であった者が、訓練を楽しみに休まず来所し、表情豊かになった。痴呆があるため集団になじめなかった者が、集団の中へ入れるようになったなど精神的、社会的効果もみられている。これは集団指導により、参加者同志の交流がもたれ仲間意識が芽生えたこと、また、

訓練に来所することで生活範囲が広くなり、様々な刺激により生活にリズムが生じてきたからではないかと思われる。訓練票への記入は、今まで字を書く機会のなかった者にとって、書字練習になり、ひいては手指の訓練につながったと思われる。



保育園児との交流会は、現在できた仲間意識をこの集団だけにとどめず、地域とのつながりを深めていくと思われ、地域老人会、サークルへの参加等も促して行きたいと考えている。

現在、通所方法を、本人又は家族の付き添いのもとに通うことができる者としているため、付き添いがいない、遠いという理由で訓練が受けられない者や、家族の病気、都合により途中で通所できなくなった者が多く、今、通所方法について検討が必要である。また、障害者にとって家族の及ぼす影響がいかに大きいか再認識させられる。

家族会活動は、家族にとってストレス解消に役立つ、介護上のアドバイスが得られるなど好評である。今後は、保健婦主体から家族が主体となって活動できるよう働きかけていきたいと思っている。

4. おわりに

今後、障害者とボランティア組織の連携をはかるため、地域組織として育成中の家庭看護講座終了者による「あすなる会」会員の訓

練参加を試みるとともに、家族会活動を地域へ広め理解を深めたいと考えている。

また、リハビリテーション施設など関係機関との連携を深め、施設と地域が一本化したケアができるよう努力したいと思っている。

今回、機能回復訓練に取り組み、地域リハビリテーションの重要性を再認識するとともに、健常者に対する健康増進、疾病予防対策として健康教育、健康診査をより充実していかなければならないと痛感した。



最後に参加者の句と歌をのせておく。

- 八十路すぎズボンはいていくうれしさ
- Tシャツをナウイと言われ我が姿そつと鏡に映してみる

